

泉岳（せんがく）の露桜（つゆざくら）

松下 幹生

おのれ上野（こうずけ） 思い知ったかあ！
松の廊下に 響く喧騒（けんそう）
内匠頭（たくみのかみ）の 刃傷（にんじょう）に
皆打ち出（いで）て 止めに入（い）る
「お離し下され 梶川殿！」
武士の面子を 汚（けが）されて
浅野の心 烈火（れっか）に燃ゆる

石高（こくだか）五万 千の家臣を
すべて喪（うしな）う 覚悟の刃傷
内匠頭の 劍幕に
皆は驚き 後退り
「せめて一太刀 あと一太刀！」
恨みを込めて 振り上げる
浅野の刃 本懐（ほんかい）遂（と）げず

（風さそう 花よりもなお 我はまた
春の名残を いかにとやせん）

内匠頭の 切腹に
家臣の胸中 不審染め
「片岡すまぬ 無念じゃあ！」
後は頼むと 申し置き
内匠頭は 露と消えゆく

郷の月光

松下 幹生

残照の後 月の光りが
凧の湾内 海面を照らす
ふるさとの 丘の上から 眺めれば
子供の頃の 思い出が…

幼馴染の 悪ガキどもが
蛍見つけに 集まった時
見下ろした 水面に写る 月影に
思わず見とれ 声も出ず…

入江をはさむ 黒い山肌
その真上には 満天の星
ふるさとの 夜空は今も 変わらず
郷を明るく 照らし出す…

丘の上から 月食を見た
月が端から 欠けてく様を
仲間らと 幼い胸に 刻みつつ
天の不思議に 想い馳せ…

月の中には ウサギの姿
そんな形に 広がる想い
月の影 ロマン漂う 空想に
神秘の世界 垣間見る

安土山から

松下 幹生

近江の地 夜空を焦がす 篝火に
浮かび上がるは 安土城
金に輝く 天守を望み
天下を治む 風格を
都に続く 街道に
睨みを効かし 堂々と
信長の夢 日本国中 知らしめる

天守から 琵琶湖を望む 眺望と
遥かに霞む 比叡山
僧兵たちの 横暴に
寺も 山さえ 焼き払い
仏恐れぬ 行いも
すべて世の為 人の為
信長の名を 日本国中 知らしめた

安土山 歴史の流れ 見つめ来た
頂きまでの 石段を
一段ごとに 踏みしめる
家臣の家跡 点在し
石の仏を 拝みつつ
本丸跡を 登り詰め
信長の夢 偉人の栄華 思い知る

天空のテラス

松下 幹生

紺碧の空 雲1つなく 晴れ渡り
眼下には 遙か広がる 鳩の湖(うみ)
天空に 身を浮かばせて
鳥のよに 天下手にする 眺望に
気分も晴れる 琵琶湖のテラス

向こう岸には 強者どもの 夢の跡
いにしへの 今は静かな 時流れ
二人には 風も優しく
頂きの 空に飛び出す ブランコが
ハイジのような 山上テラス

頂上までは リフトに乗って 空の旅
悠久の 自然織り成す 風景に
君と来て 心踊らす
今がある 万感の夢 時忘れ
天にも昇る 天空テラス

愛と友情の狭間で…

松下 幹生

午前五時 スマホが鳴って
夢の中から 引きずり出され
枕を抱いて 呻（うめ）く俺
「曲が浮かんだ！ 出来たんだ！」
耳に飛び込む 叫び声
バンドのライブ 演目曲が
出来上がったと マサが言う！

三人の バンドの仲間
やっとなつかんだ ライブの出番
マサとユキとの デビュー曲
「今すぐ飛んで 来てくれよ！」
バイトがあるが まあいっか！
シャワーも浴びず 駆けつけた
ドアを開けたら…
キスしてた…

目が合って 時間が止まる
マサと俺との 暗黙事項
抜け駆けだけは 止めとこう
「いや あの これは… 誤解だよ」
何も言えずに 飛び出した
どれほど時が 経ったのか
バンドを辞めて 旅に出よう

いつ癒えるのか この傷は…

薫風に吹かれて

松下 幹生

祖谷の吊り橋

薫風（かぜ）にたなびく 長い髪
破って捨てた ヤツの写真（フォト）
風に破片（かけら）が 舞う紙吹雪
春まであなた 信じて生きた
消してしまおう この谷に…

高知駅から

バスに揺られて ひとり旅
平家の武者が 居たという
溪谷の奥 ランプの宿で
自分を見つめ 世間を閉ざす
昨日を捨てる この谷に…

今夜一人で

いで湯に浸かり 流し去る
三年間を さっぱりと
そして明日の 朝陽に向かい
晴れた心で 出直す私
門出を誓う この谷で…

会津の紀風（こころ）

松下 幹生

会津の紀風 ならぬこと ならざるべしと
幼き頃に 教えられ
郷土を愛し 誇りを持って
生きてきたから 今がある
戊辰（ぼしん）の後を 黙って耐えた
会津男の 心意気

丘の上から やさしい眼
街を見守る
観音様の お姿に
郷土を守る 誇りを持って
薩摩の攻めを 迎え撃つ
八重のこころを 大切に
会津女の 心意気

藩を守ると 男の子（おのこ）らも
白いタスキが
凛々しい姿の 白虎隊
郷土を守る 気概を持って
守備を堅める 鶴ヶ城
若き命を 郷土に捧げ
会津の紀風 引き継いで

彫り師 龍 (たつ)

松下 幹生

木曾の檜を 三年置いて
木地を極める 目利きの技で
松竹梅を 透かし彫り
彫刻欄間 見事に仕上げ
代々続く 職人技の
彫り師 五代目 龍五郎！

欄間のはまる 屋敷も減って
腕が鈍ると 嘆き呑む男 (やつ)
厚み一寸 彫り込んで
文化財にも 取り上げられた
匠の技の 職人氣質 (かたぎ)
彫り師 五代目 龍五郎！

一世一代 命を懸けて
男が挑む 極めの仕事
本丸御殿の 飾り彫り
息をのむよな 龍虎の姿
魂込めて 気迫で削る
彫り師 五代目 龍五郎！

般若

松下 幹生

キャンドルの灯に
照らし出された 猜疑心
般若の面に 表れて
怒ってる？ 泣いている？
ここは新宿 夜のパブ
女の駆け引き 男の打算

オープントップの
隣に座る ケバい女 (やつ)
ビルの窓から 見られてた
誰なのよ？ 答えてよ？
ここは新宿 夜のパブ
般若の声が 男を責める

こんな男が オープン外車？
ガラじゃない！
ちょっと変だと 気づくはず
金づるさ！ 分かるだろ！
ここは新宿 夜のパブ
惚れちゃいけない こんな男に

流転の津軽… あなたを追って

松下 幹生

断崖に コートの裾を ひるがえし
波に向かって 泣く女
風が 雪が 頬を打つ
あなたの帰り 待ちわびて
やって来ました 竜飛崎
呼べど届かぬ 北の果て
ああ 恋追う女 流転の津軽

ただ一度 届いた便り 握りしめ
翔んで来ました 津軽まで
風が 雪が 哭き叫ぶ
あなたの姿 思（お）い求め
吹雪の中に 立つ女
雪のつぶてが 打ち掛かる
ああ あなたを慕い 雪積む津軽

風が 雪が 追い縋る
あなたの声が 聞こえない
風がかき消す 面影を
探し求めて 一人また
ああ 女が彷徨う 津軽の旅路

狂情歌

松下 幹生

篠突く雨に
着のみ着のまま 人目を避けて
手に手を取って 裸足で逃げる
世間が辞さぬ 関係（あいだ）の二人
炭焼き小屋に 密（ひそ）み入り
濡れた身体を 抱きしめて
手を握り 肩に歯をたて 息殺す
行く当てのない 修羅の道行き

衣を脱いで
火も起こせずに 命火燃やす
熱い口唇 うごめく身体
殺那の情を 燃え上がらせて
心の芯も 熔けるよな
道にはずれた 恋に酔う
冷めやらぬ 燃え立つような 燻（くすぶ）りに
互いを求め 奈落に落ちる

ああ～あ 天よ地よ

我らと共に 滅びらむ（ん）
互いの小指 糸で結（ゆ）い
蛇の様（よ）に 身体を巻き付け 求め合う
共に墮ち行く 修羅の道行き

総司花伝（そうじかでん）

松下 幹生

日野の地で 理心の蕾 開花して
明るい笑顔の 美剣士が
ひとたび刃を 手にすれば
構えも凛々しい 百合の花
蘭の歳三 牡丹の勇
清河をくださる 呉越同舟 花筏（はないかだ）

京に入り 壬生（みぶ）に集いし 烏合の志
思想揃わぬ 二輪草
鉄扇組等（ら）の 狼藉に
鴨が飛び立つ 涙雨
総司も羽織る だんだら染めで
かたくり（容保）の下（もと）
尊皇攘夷の 枝はらう

池田屋の 萩の者等（ら）の 会合に
一網打尽と 攻め入って
菊一文字 刀鳴りさせ
次の座敷に 入りし時
椿の花を 喉から散らせ
その場に墮ちる
美剣士総司 なんとした

儂き華は 散りゆく定め

リヨンの空へ…

松下 幹生

遥かな星に かなたな願い
遠いあなたへ
辛い事など ないですか？
きちんと食べて 暮らしていますか？
母の思い 時空を超えて
届けと願う
リヨンの空へ

遥かな土地へ かなたな思い
遠いあなたへ
部屋は寒くは ないですか？
手持ちのお金 有りますか？
母の願い 時空を超えて
届けと叫ぶ
リヨンの空へ

遥かなフランス かなたの息子
遠いあなたへ
ローヌとソーヌ 双河（そうこう）の
中世の風 味わいに
母の心は 時空に乗って
翔んで行きたい
リヨンの空へ

AVENER (アベニール)

松下 幹生

氷の刃 懐に
君を抱 (かか) えて 瑠璃色の空 舞い上がる
過去のしがらみ 街の喧騒
すべて脱ぎ捨て 大空へ
Avener! (アベニール)
空へ 明日へ 自分を信じ

祖国の灯が 遠ざかる
オルジェの星が 誘 (いざな) うように 光ってる
未来の夢を 明日の行方を
君と二人で 駆け抜ける
Avener!
空へ 明日へ 互いを信じ

僕らの夢を 明日の希望を
君と二人で 駆け抜ける
Avener!
空へ 明日へ 未来を信じ

懺悔するは殻の中

松下 幹生

私は殻に 閉じ籠り
魂が ゆらゆら辺りを 飛び回る
過去が未来を 啄（ついば）んで
ただ一人 闇にたたずみ
明日のない身を 昨日が責める
朽ち果てるまで 静かに深い 海の底

ナイフが群れて 襲い来る
その1つ 掴めばナイフは 暴れだし
一面朱の幕 張りめぐる
生きている まだ生きてるが
幾多の人の 未来や希望
傍若無人に 踏みつけるよな ヤツだった

四角い壁の 鉄格子
窓の外 夜空に切り取る 月を見る
正義の責めに 支配され
逃げ場など 有るはずもなく
明日を消し去る 靴音響く
殻に籠った 私は呻（うめ）き 懺悔する

漁場（いくさば）大間崎

松下 幹生

怒涛渦巻く 波頭の先に
微（かす）かに跳ねた 魚を追って
先を競って 押し寄せる
雪も 波も 蹴散らして！
一番マグロは 頂いた
大間の漁場 先陣競う

仲間の船を 従い連れて
一番乗りで 漁場に向かい
荒れた波間に 仕掛け打つ
針よ 糸よ 頼んだぞ！
過去にバラした 獲物を想い
今日こそ大物 連れて来い

来たぞ！来た来た 待望ヒット！
マグロは必死で 潜って逃げる
こちらも必死で 耐え忍ぶ
腕よ 体よ 我慢だぞ！
悪戦苦闘の 戦（いくさ）を征し
お宝の影 現れた時

龍神様に 切なる感謝！

夜半（よわ）の月影

松下 幹生

信濃の山道 単騎で駆ける
お館様へ つなぎの為に
月夜に白く 光る貫道
躑躅ヶ崎（つつじがさき）へ
10里の夜道を ひた走る
甲斐の武田の 赤備え（あかぞなえ）

獣の遠吠え 背中に聞いて
鉢金（はちがね）の尾を なびかせながら
馬上の若武者 不乱に走る
夜半の月影 付き従えての 夜道駆け
甲斐の武田の 忠義心

つなぎを果たし 暫しの憩い
崖の切っ先 見上げる月に
額の汗も 夜風に涼し
復路を思い 具足（ぐそく）を締めて 整（ととの）える
甲斐の武田の 赤備え

海峡渡し船

松下 幹生 (売却済)

海峡渡る 風が哭き哭き
心の隙間に 入り込む
粉雪が舞う 岬にたたずみ
海峡渡船 (とせん) を 見送る女
帰る日を待ち 命火ともす

あなたはきっと 帰って来ると
三月 (みつき) の夜を 枕抱き
春にはあなたの 光る笑顔が
海峡渡船で 波を乗り越え
わたしの元へ 戻ってくるわ

岬の桜が 散りはじめても
あなたを乗せた 船は来ず
沖を見つめて あなたを呼べば
海峡渡船が 空しく通る
わたしの胸は 涙に濡れる

SALTY DOG (ソルティドッグ)

松下 幹生

いつもの店に ただ一人…
薄暗い店 カウンター
あの人が飲んでた
ソルティドッグ

女ひとりで 苦い酒
メール1つも 来やしない
あいつ あいつの名前 指で書く
飲んでも 飲んでも 酔やしない！
あいつ今頃どこの街
涙で割る酒 一人酒

グラスに映る 悲しい目
女に群がる 好奇の眼
お呼びじゃないわと
ソルティドッグ

女ひとりの 苦い酒
電話掛けても 出やしない
あいつ あいつの居所探し当て
掴んで 千切って 捨ててやる！
あいつ今頃 どこの街
ひとり彷徨う 夜の街

思い出すたび 辛くなる
あの手 あの指 爪さえも
頭の隅から 離れない
あいつ今頃 どこの街
ソルティドッグを 誰と飲む

MY TREASURE ～たからもの～

松下 幹生

つぶらな瞳 小さな手
小柴がじゃれ付く 芝の上
天使の君が はしゃいでる
初夏の陽射しを 跳ね返し
白い服着て 飛び回る
キャッキヤと声がこだまする
良かったなあ 家族が出来て

小さなペンション 丘の上
都会を離れ 澄んだ空
家族連れ立ち 小旅行
牧草の上 川の字で
仰げば空に そよぐ雲
いつの間にやら 昼寝する
良かったなあ 家族と来れて

君もそろそろ 保育園
ママが作った お弁当
友達一緒に 食べるかな？
お遊戯 絵本 お絵かきと
忙しい日が 待っている
君の成長 楽しみだ
良かったなあ 家族になれて

ふるさとの洛陽

松下 幹生（売却済）

遠い鐘の音 郷の灯ともす
夕暮れ 虫の音 下駄の音
飛驒の合掌 道の端（は）瀬音
石畳 床机（しょうぎ）風鈴 かき氷
タモを持つ子が 馳せ回り
野辺の夕陽が 時告げる
ああ 懐かしいふるさとの夏

黄金の穂咲く 輪島の棚田
辺りを飛び交う アキアカネ
山間（やまま）を渡る 涼風（すずかぜ）優し
紅葉（こうよう）に 揺れるススキが 華を添え
空を上げば いわし雲
海の彼方に 陽が沈む
ああ 懐かしいふるさとの秋

四季折々に 眼を楽しませ
ふるさとの陽が 暮れてゆく
日本の景色 いつまでも
心にとどめ 伝えたい
ああ 懐かしいふるさと山河

ふるさとの旭陽

松下 幹生 (売却済)

雪の立山 雄々しい姿
朝霧 雷鳥 冬木立
朝陽に映える 太刀の峯々 (みねみね)
家々に 朝餉 (あさげ) の煙 立ち上り
朝光伸びゆく 雪の原
モッコを担ぐ 人が行く
ああ 懐かしいふるさとの冬

伊豆の川辺に 早咲き桜
せせらぎ 鳥の音 散歩道
桜並木を ピンクに染めて
朝風に ほのかに匂う 桜華
河津七滝 (ななだる) わさび畑
伊豆の踊り子 よみがえる
ああ 懐かしいふるさとの春

四季折々に 眼を楽しませ
ふるさとの陽が 立ち昇る
日本の景色 いつまでも
心にとどめ 伝えたい
ああ 懐かしいふるさと山河

雨の二寧坂

松下 幹生 (本人歌唱)

清水 (きよみず) 上がる 二寧坂
小雨にしっとり 濡れそぼり
霞む景色に 佇むあなた
軒を連ねる 店先の
潤む灯りも はんなりと
飾り小物が 色をなす

行き交う人も ゆったりと
古都の風情に 身を委ね
浴衣姿も 墨絵のような
かざす和傘 (かさ) さえ 艶めいて
下駄音響く 京の宵
二人連れゆく 二寧坂

宿まで辿る この道を
夜霧がうっすら 包み込み
幻想的に 醸 (かも) し出す

ああ 二人秘かに 二寧坂
二人秘かな 二寧坂

想ひ

松下 幹生

想ひ女がため 魂（こころ）を込めし 簪（かんざし）の
（きみ）

槌音（つちおと）響く 宵の月

行灯（あんどん）の 揺れる灯（ひかり）に 照らされて

妖しく反射（ひかる） 銀の肌

細工は細かく 縮緬背景（ちりめんはだ）に 竜胆（りんどう）の華

春の陽に 桜の下（もと）での 擦れ違い

小さき悲鳴（こえ）の 聞こえたり

華下駄の 鼻緒が切れて よろめいた

その女（み）を受けて 支えより

下駄挿げ替えに 肩を貸す目は

憂いの萤火（ほたび）

恋い焦がれ 想ひ届けと 付け文の

格子の隙より 差し入れし

待ちかねた 嬉しき返事の 来たりなば

想ひ届きて 身（はだ）重ね

炎（ほむら）の如き この身預ける

熱き閨床（ねやどこ）

人妻（ひとはだ）愛しき 夜半（よわ）の月）

鈴鹿七山（セブン）

松下 幹生

子供の頃から 眺めてた
西の空に雄大な 峰が連なり
雪をかぶった頂きの 凜々（りり）しき姿
藤原岳 竜ヶ岳 釈迦ヶ岳
大人になったら 登ってみたい

濃尾平野を 一望し
北勢（きた）を潤す 源（もと）となる
命の川が
我らを抱く 母のように 心優しく
御在所岳 風雪を試練として
我が身を 鍛えし父のように

近江の国との 堺と成り
鳩（にお）の水面を 渡る風
敦賀の伊吹
椿の社（やしろ）に 届けたる鈴鹿風（おろし）
鎌ヶ岳 雨乞岳 入道ヶ岳
峠の灯籠（とうろう） 灯火（ともしび）ゆらす

銃後の母

松下 幹生

寝静まってる 春の宵時
突然ドンドン 戸を叩く音
何事か？と 出てみれば
役場の人 が 立っていた
その手にあるは 赤紙一枚

父が一言 ついに来たかと…
五つの僕には 分からなかった
母は父の背に すがり付き
死んだらあかん！と 泣きじゃくる
それでも聞こえる おめでとうの声

二週間後に 父は出兵（たびだ）ち
気抜けた母の 背中を摩する
やがて空襲 襲い来て
僕を抱きしめ 震える母
あんた帰って！と 泣き叫ぶ母

勸進帳 …安宅（あたか）の関…

松下 幹生

（セリフ）

「山伏姿の義経主従一行が、安宅の関に差し掛かる」

我ら勸進（かんじん）の旅にて

関をお通し願いたい

「通れ！」と言われた その後に

そこな若造 九郎に似やる！

弁慶進退極まった

己が似やるばかりなり！

金剛棒にて 打ち据える

九郎痛みにジッと耐え

弁慶目には涙溜めて

こいつ！ こいつ！と打ち据える

（セリフ）

「関守富樫 もう良いやめよ！と止めに入り、ならば勸進帳を見せたもう！」

笈（おい）には 白地の巻物が

弁慶すらすら読み始め

覗き見されじと 身をよじり

最後は富樫に 白紙を晒し

どうかお通し願いたく！

ああ 弁慶は立役者なり

かんぱいっ！

松下 幹生

ビールで乾杯
みんなで乾杯
お前と俺で 盛り上がりうぜ
飲め飲め上がれ
上司も部下も ありやしねえ！
月が昇れば ツキも上がるさ
さあさ みんなでジョッキをあげろ！

チューハイで乾杯
仲間と乾杯
同期のヤツと 盛り上がりうぜ
グチも文句も
企画もノルマも ぶっ飛ばせ！
課長も部長も 超えてやるさ
さあさ みんなでジョッキを上げろ！

ハイボールで乾杯
あの娘と乾杯
胸の中身を ぶちまけようぜ
酒のチカラで
当たって砕けて バラバラでけど
今夜はトコトン飲み明かそうぜ！
さあさ みんなでジョッキを上げろ！

加賀の人待ち草

松下 幹生

路地裏の ひなびた酒場の 片隅で
一人寂しく 注ぐ酒
秘かに流れる ブルースに
昔のあの娘が よみがえる
薄暗い 灯りの中に
金沢（この）街が…
あの頃は 楽しかったと 思い出す

君の夢
都会（まち）でデザイン 勉強（やりたい）と
金沢（ここ）は優しい 街だけど
光るセンスが 欲しいのと
加賀の伊吹を 織り交ぜたいと
意気込み君は 出ていった
金沢（この）駅を
君が去り 便りも届かず 音信不通（とだえた）

10年後 香林坊の 片隅で
一人手酌の 酒に酔い
止まった時間の 傷舐める
カウンターには 黒百合1輪
惨めな僕を 見つめてる
逢いたい… 君に…
鼓の駅で 帰るはずない 君を待つ

里山暮らし

松下 幹生

あなたと二人 並んで二人
出窓の外を 眺めてる
庭には 野菜と花畑
猫が通って あくびを1つ
実にのどかな 昼下がり
いいものね いいもんだ！
日向ぼっこの あなたとわたし

あなたと二人 冬の散歩道
冷たい風が 吹き抜ける
遠くの峰は 雪かぶり
寄り添う影が 並んで歩く
紅い夕陽の 帰り道
いいものね いいもんだ！
家路を辿る あなたとわたし

これから先も 二人仲良く
支えあいあい 生きてゆく
いいものね いいもんだ！
終の棲家で あなたとわたし

バーボンシャワー

松下 幹生

深夜のビルで 螺旋階段 響く靴音
ふらつく足で 昇る俺
彼女（やつ）が消えた夜（よ）
孤独な俺は
口に含んだ バーボン吹き上げ
空虚（うつろ）な心 濡らすよに
今夜はシャワー
バーボンシャワー！

何もいらねえ みんな消え去れ 邪魔だどけどけ！
夜も女も 酒さえも
今夜の俺は ツレさえウザい
彼女（やつ）の笑顔が 脳裏をよぎる
俺は苦悩に 膝かかえ
今夜は一人
バーボンシャワー

お前なんかに 未練はないさ
どっかの男に くれてやらあ！
戻ってくるなあ！

…帰ってきやがれえ…

高遠桜

松下 幹生

春の日差しに 山一面を 華に染め
遠くアルプス 霞み見る
青い空 白い峰 新緑を背に
艶（あで）やかに満つ 木の下で
蝶のよに 移り撮る 君を目で追う
ああ 伊那の楽園 高遠桜

残雪溶けて 厳しく寒い 冬も去り
コブシも咲いて 春の香風（かぜ）
山の坂 登りきり 開けた眺め
艶（つや）めく髪を なびかせて
風に溶け 絵のような 君の姿に
ああ 春の楽園 高遠桜

桜の丘に 朱色の屋根が 調和して
信玄公も 愛でたのか
幽閉の 絵島の目も 安らげたのか
二人で座り 桜餅
のんびりと 流れ去る 至福の時間
ああ 今年も来れたね 高遠桜

多度大社 上げ馬神事

松下 幹生 (本人歌唱)

多度の山々 皐月 (さつき) の空に
いにしえ人より 伝わりし
白馬 (しろうま) 伝説 天馬が駆ける
良民達の 願いを乗せて
六郷寄りて 覇 (は) を競う
古代の神事 綿々 (めんめん) と
今上 (こんじょう) 伝来 上げ馬祭り

神の遣 (つか) いの 乗り子と成りし
己れの名誉 ありがたき
今は無心に 馬と語りて
重き役目に 燃え尽きる
多度の神々 ご加護あれ
古代の神事 綿々と
今上传来 上げ馬祭り

多度の山間 (やま) に 轟き響く
蹄 (ひづめ) の音も 勇ましく
武士 (もののふ) 若人 (わこうど) 騎乗せば
真一文字に 駆け上がり
人馬一体 空を翔ぶ
古代の神事 綿々と
今上传来 上げ馬祭り

セピア色の恋物語

松下幹生

むか〜し むかし
小さなアパート 肩寄せあって
6畳ひと間に こたつとラジオ
やっとなんやんの 生活で
バイトの店の フランスパンを
互いに端から かじってたけど
二人はいつも 笑い合ってた
懐かしいよね あの頃が

むか〜し むかし
遊びたいなど せがんでみたら
ダンボール紙 広げてみせて
土手の草むら 滑り台
Gパン破れて 服泥だらけ
なんとかなるさと うそぶいて
お金は無くても 幸せだった
思い出すよね あの頃を

あれから40年
白髪も増えたし 孫も3人
今日は結婚 記念日で
皆が集まり 賑やかな夜
あなたと暮らした 至宝の時間

星になるまで
一緒に居てくださいね。

君想曲（きおく）

松下 幹生

運河を見下ろす アパートの
セピア色した 四畳半
ささくれ立った 畳の上で
古いギターを 爪弾いて
思い出の曲 奏でて
あの頃 あの娘が 好きだった
想いのままに 口ずさむ

些細な事での 行き違い
思わず怒鳴って 手を挙げた
頬を押さえて 潤む君の瞳（め）
振り切るように 出て行った
止める事さえ 出来ぬ俺
あの頃 あの娘が 好きだった
取り返せない 蒼い日々

今でも苦く 思い出す
二人で聞いた ラブソング
あの頃 あの娘が 好きだった
取り返せない 遠い日々

角館慕情（かくのだてぼじょう）

松下 幹生

夕陽に紅葉（もみじ）が 黄金に染まる
あなたと連れ立つ 角館
私が生まれて 育った街の
風情豊かな 城下町
ああ いついつまでも このまま二人
暮らしていたい みちのく小京都

山と川との 自然の中で
桜並木と 武家屋敷
時の流れが 止まったような
面影残す 佇まい
ああ 来世も共に 添い遂げたいと
願う二人の 郷愁角館（こしゅうかくのだて）

古城山城（こじょうざんじょう） 桧木内川（ひのきないがわ）
雪を纏った（まとった） 祭りの日
横顔照らす 火振り（ひぶり）の炎
凜々しいあなたを 引き立てる
ああ 幸せ願う 二人を包む
かまくらのよな 角館慕情

初夢七福神

松下 幹生

新年最初に見る夢は
目出度いものと 言われてる
諸説色々あるけれど
一に富士山 二が鷹で 三に茄子（なすび）の
そのあと まだまだ続きます
四に扇子で 五に煙草 六が座頭で
そこまで見たら 松明ける

この世で目出度い神様は
宝船乗り やって来る
ざんざんざんと やって来る
一に恵比寿 二は大黒 三は毘沙門
そのあと まだまだ続きます
四に弁財 五に布袋 六寿老人
トリを飾るは 福祿寿

世の中目出度い 格言は
福にあやかり 出世する
枯れ木に花が 咲きまして
猫に小判と 招き猫 打出の小槌と
そのあと まだまだ続きます
ここ掘れワンワン ポチが吠え
掘ってみた時
お宝見たら 目が覚めた

泣くな母ちゃん！

松下 幹生

茶碗を洗う 母の背が
ふるふる揺れて 泣いている
流しに落とす 涙の粒が
はじけて咲かす スズランの花
泣くな母ちゃん！
いつか笑える 時が来る
そんな日を そんな未来を
きっとあげるから

今日も聞こえる 父の声
怒鳴る言葉も 理不尽な
隣近所に 聞こえる程の
酒に呑まれた しゃがれた声に
泣くな母ちゃん！
僕がついてる 盾になる
かばう為 守る為に
僕がここに居る

泣くな母ちゃん！
いつか笑える時が来る
そんな日を そんな未来を
きっとあげるから

☆多0時の・・・おんな

松下 幹生

あんたを想い 待ちわびる
窓の外 行き交う人の
影にあなたの 歩き癖
追い求めては 涙する
ネオン街 瞳を凝らし
探す 0時の 0時の・・・おんな

曇りガラスに 指で描(か)く
似顔絵の 眼から滴(したた)る
雫(しずく)はまるで 涙雨
待っても来ない あなた待つ
キャンドルの 揺れる灯(ひ) 見つめ
耐える 0時の 0時の・・・おんな

真夜中過ぎて 店を出る
小雨降る 歩道に一人
行くあてもなく 佇(たたず)んで
橋の上から 小石蹴る
やるせない 思いを込めて
嘲笑(わらう) 0時の 0時の・・・おんな

闇夜の鴉

松下 幹生

誰にも見られず
誰にも会わず
そっと会いに 来て欲しい
あなた足音 忍ばせて
カラスのように 闇に溶け
そっと そっと 疾風のように
待ってる 待ってる 迎え灯点けて

ガラスにコツン
小石が当たる
この音を 待ちわびて
胸を弾ませ 招き入れ
逢瀬の時が 包み込む
そっと そっと 抱 (いだ) き合い
ゆっくり ゆっくり 高揚 (たかみ) に昇る

人目を忍ぶ 真夜中の
時はたちまち 過ぎて行く
きっと きっと また今度
待ってる 待ってる 女のころ

潮騒の島

松下 幹生

傷心の この身の辛さ 癒すため
やって来ました 潮騒の島
新治と初江を 我が身と捉（とら）え
なさぬ仲 あなたと私
釣りあわぬ恋 見つめる為に
監的哨（かんときしょう）の この島へ

「のうが火を この火を跳んで 来たならば！」
勇気をもって 飛び出せば
気持ちが一とつに なる筈だった
踏み込めぬ あなたと私
親の引け目が 災いとなり
早（はや）引き裂かれ ひとり旅

荒波の 鳥羽の港を 船が出る
後ろ髪引く 面影を
神島灯台 巡って捨てる
そんな時 あなたの姿
私を追って 伊勢の島まで
離しはしない いつまでも

帰郷

松下 幹生

軒に吊るした 干し柿が
夕陽に朱（あか）く 染まる頃と
ふと 懐かしく思い立ち
里ごころに 背中を押され
懐かしい 風と香りに 包まれて
ひとり降り立つ ああ ふるさとの駅

実家（さと）の縁側 陽に当たり
とうもろこしを 頬張れば
ふと 幼き日の 思い出が
ヨッちゃん達も どうしているか
懐かしい 友達の事 気にかかる
のんびり過ごす ああ ふるさとの家

川に蛍が 飛び交って
郷（さと）の一日 暮れて行く
ふと 鴨居の上を 見上げれば
じっちゃんの写真（かお） 優しく笑う
懐かしい 空気に触れて 満たされた
明日には帰る ああ 俺達の街

陰り顔

松下 幹生

切なげな あなたの表情（かお）が
酒場の隅の 淡（あわ）い灯（ひ）に
浮かび上がった やつれ顔
ひとり暮らしの 辛さを写す
それならば それならば いっそ
貴方と共に 暮らしたい
それならば それならば 愛を
貴方と共に 育てたい

ハンドルの 貴方の指に
光るリングが 寂しげで
あなたの心 あらわして
癒してあげたい わたしの胸で
それならば それならば いっそ
貴方と共に 暮らしたい
それならば それならば 愛を
貴方と共に 育てたい

それならば それならば いっそ
貴方と共に 暮らしたい
それならば それならば 愛を
貴方と共に 育てたい

折鶴

松下 幹生

たった一つ あなたが折れる 折り紙が
均整とれた 折り鶴で
私に勇気を くれる鶴
あなたの優しさ 滲み出る
きっと元気に なるからね
ベッドから あなたの笑顔 仰ぎ見る

目覚めたら あなたが側で 居眠りを
座ったままで 項垂れて
その手に折り鶴 握られて
疲れているのね ごめんなさい
桜の頃には 歩けるワ
約束よ あなたと並び 散歩する

目が霞む 意識が濁る その中で
あなたが部屋に 飛び込んで
しっかりしろよと 手を握る
私の命は 仕舞うのか
あなたと約束 守れずに
折り鶴を 握ったこの手 ちからつく

2023・12・12 作成

南港・・・あなたを待ちわびて

松下 幹生

大阪南港 フェリーターミナル
朝もやの中 あなたを乗せた
船が静かに やって来る
出迎える事 知らせずに
オンボロ車で 駆けつけた
おとなしく じっと待てない
あなたの あなたの
あなたの 私です

あなたは何も 予想もせずに
目の前に立つ 私をみつけ
驚きの目で 近づいて
笑顔を見せて ただいまと
優しくそお〜と 抱き寄せる
嬉しさに 涙を落とす
あなたの あなたの
あなたの 私です

ひと月の夜を あなたを待つて
狂おしい 時を過ごした
あなたの あなたの
あなたの 私です

みちのく巡り会い

松下 幹生

雪の中 凜とそびえる 三重の塔
張り詰めた 空気を醸 (かも) す 高畠の
安久津の社 訪れた
寒さにキリリ 身が引き締まる
あなたとの 甘い思い出 振り切る為に
北国 (ほっこく) みちのく 山形へ

憧れて この北国に 移り住む
春の陽は 優しい風が 頬を撫で
夏の森には 蝉しぐれ
秋は散りゆく 落ち葉に別れ
雪景色 四季折々の この色模様
心癒さる 奥州路

月日経ち 龍蔵桜 (りゅうぞうざくら) の 木の下で
巡り会う 素敵な人を 待ち望み
花咲山の 展望で
あなたと二人 サクランボ
新緑が 眩しい季節 新たな出会い
心が弾む 北の国

2023・12・14 作成

お市の運命（さだめ）

松下 幹生

清洲の城に 華麗に咲いた
戦国一の 織田の姫
近江路を 風通しする 糧となり
兄に乞われて 小谷城
長政殿の 妻となり
鳩（にお）と伊吹に 守られて
市はしあわせ 者でした

「浅井（あざい）の裏切りじゃあ！
おのれ！ 長政〜っ！ 退却じゃあ！
猿！殿（しんがり）申し付ける！」

市の生涯 悲劇の予兆
金ヶ崎への 急報（しらせ）跳び
義兄弟（きょうだい）の 契（ちぎり）を破る 行いに
姉川の地を 血に染めて
朝倉共に 滅びらん
悲しきすべに 涙する
市の運命（さだめ）が 墮ちてゆく

三姉妹連れ 柴田の元に
涙で嫁ぐ 北の庄
秀吉が 親父と仰ぐ 勝家に
刃（やいば）を向ける 賤ヶ岳（しずがたけ）
もはやこれまで 討ち死の
娘（こ）らの命と 引き替えに
市の生命（いのち）が 消えて逝く

北へ・・・女ひとり

松下 幹生

小雪舞う 青森の空 降り立てば
迎える人は 誰もなく
孤独な旅路 津軽の海へ
寒風が打つ 頬の痛みに 耐えながら
あなたの温み 削ぎ落とす為
一人来ました 北の果て

カモメ舞う 青森港で 振り向けば
お岩木山を 右に見て
八甲田山 左に望む
絵に描いたよな 冬山景色 眺めては
厳しい明日を 肌身に感じ
一人生きてく 決意する

海辺にて 冷えた身体を 癒すよに
浅虫の湯で 温まり
心の傷を 優しく包む
強い音色の 津軽三味線 身にしみて
希望に燃える 明日に挑む
一人向かうは 龍飛崎

2023・12・22 作成

郡上の夜（や）踊り

松下 幹生

山と溪流（ながれ）の 城下町
奥美濃の 小京都
郡上の夜を 華やかに
お盆の間 4日3晩を 踊り暮れ
浴衣姿に 檜の下駄で
賑やかに 密（ひそ）やかに
あなたと絆 深めたい

天空の城 八幡城
朝霧に 浮かぶ様（さま）
郡上の郷を 美下ろして
昼夜を通す 踊りを眺め 歓喜する
転木磨歌（するまうた）より 変わらぬ状態（かたち）
賑やかに 密やかに
江戸より続く 踊り唄

一晩通し 夜（や）踊りで
すり減った 檜下駄
雨も降らぬに 袖しぼる
寒水の中 幟（のぼり）を流す 寒ざらし
洗うあなたを そっと眺めて
密やかに 秘めやかに
心に詰めて 街を出る

タクシードライバー

松下 幹生

夜の街 闇を切り裂き 走るタクシー
狭い車内は 密室小宇宙 (コスモ)
様々な 人間模様 繰り広げ
悲喜こもごもの ドラマあり
俺はこの道 20年
人の本心 垣間見て来た

横柄な 態度で怒鳴る 若輩モンを
腹の中では 鼻で嗤 (わら) うも
人の世の 生死の現場 関わって
急ぐ人達 運び来た
俺はこの道 20年
人の日常 関わり走る

人間の 上下左右と 喜怒哀楽を
聞かされ続け 悟りをひらく
様子見て 客の性格 見極めて
人の善し悪し 判断し
俺はこの道 20年
人を信じて 車を停める

再会輪廻（さいかいりんね）

松下 幹生

今まで生きた 時間の中で
関わりもった 人達の
親しい人と 消えた人
果たして何人 居ただろう
その中に 唯一無二の 君が居る
現世でも 来世でも また居て欲しい
輪廻転生 再び出会う 巡り会い

子供の頃の 思い出の中
近所の人や 同級生
話す事さえ 出来ぬ子も
友達同士で 騒いでる
その中に 未来につなぐ 人がいた
君の事 見詰めてる 少年時代
合縁奇縁 再び出会う 同期会

運命の時 再会果たし
過去の想いを 打ち明けて
今やかけがえ 無い人に
天寿を全う した後に
必ずや 再び君と 出会うため
目印に 口元の ホクロは残し
一期一会の 再会果たす 巡り会い

能登路 女一人旅

松下幹生

自分探しの 旅に出る
人の為 何が出来るか 考えようと
能登の荒海 風に吹かれて
岸壁に立つ 巖門(がんもん)と
延々と 浜辺を走る 千里浜(ちりはま)に
能登の手厚い 出迎え受けて
独り旅行く 日本海

この世に生まれ 生きて行く
雑念を 振り払おうと 能登半島を
巡る女の 孤独と哀愁
輪島朝市 眺め行き
珠洲岬(すずみさき) 夕陽を拝む 絶景と
聖域岬 青の洞窟
見るも鮮やか 能登の旅

ゆっくり旅して 富山湾
本当に 愛しているか 自分に問うて
頭の中を 真っ白にして
恋路海岸 見附島
あの人を 信じて生きる 決断を
能登島の地で 独りで出した
振り返らない 迷わない

馬籠の宿で・・・

松下 幹生

晴れ渡る空 木漏れ陽浴びて
貴方と歩く 石畳
宿場路 軒が連なり 人の波
水車を廻す 水路には
鯉がゆったり 尾びれ振り
昔の人の 苦勞が滲む
坂道続く 馬籠宿

中山道の 宿場街道
つるべ落としの 秋の陽に
人々の 影が尾を引く 日暮れ時
民宿の宿 探し当て
部屋に上がって 寛（くつろ）げば
外は滲む灯 街道照らす
情緒が包む 馬籠宿

風呂から上がり 一休み
夕餉の膳は 朴歯味噌
お肉も焼いて 素敵な食事
夜も暮れゆく 馬籠宿

雪燈籠

松下 幹生

大晦日 除夜の鐘の音 聴きながら
氏神さまに お詣りに
雪一面の 参道を
雪燈籠の 淡い灯（ともしび） 点々と
道行く先を 照らし出す
雪積む郷の 宵詣で

燈籠の 真横を通る その度に
姿が浮かぶ 親子連れ
父にじゃれつく 幼児（おさなご）の
はしゃぐ姿が 微笑（ほほえ）ましくて 目を細め
鳥居をくぐり 境内の
巖（おごそ）かな気に 身を晒（さら）す

年越しの あなたと詣（まい）る 初詣で
焚き火の火の粉 冬花火
夜空に飛んで 昇華する
新しい年 迎える為の お詣りで
新たな想い 年女
無病息災 願います

2023・12・31 作成

金色の雪が降る

松下 幹生

早朝の 飛驒の山中 踏み入れて
雪中行軍 息切らしつつ
ふと仰ぎ見る 木漏れ陽が
黄金に光り 射し込んで
降り落（お）つ雪が 金色に
舞い散る様が 豪華絢爛
舞台のような 艶（あで）やかさ

山肌の 膝まで埋まる 雪の中
崖の瀑氷（ばくひょう） 一目見たくて
人里離れ 峠路
滝を目指して 森深く
凍りつく滝 見るために
来たはずなのに 目を奪われた
黄金色降る 後光雪

時を忘れて 見上げてる
朝陽に映える 黄金雪
静けさの中 一人占めして
記憶に留め 山降りる

藤原三代

松下 幹生

奥州の覇者 安倍氏の末裔
前九年 後三年を
戦いぬいて 清原の氏（うじ）
家を引き継ぎ 藤原の祖（そ）を
築きあげたる 陸奥の国王
藤原の 清衡（きよひら） ここにあり

清衡のあと 栄華を引き継ぎ
世の平和 兵の鎮魂
なし得るために 平泉の地
仏の聖地 寺の建立
北の都を 築きあげたる
藤原の 基衡（もとひら） ここにあり

中尊寺建て 金色堂の
黄金に 輝くお堂
陸奥の繁栄 天下に示す
義経 兄の 追撃を避け
秀衡頼り みちのくの地へ
藤原の 秀衡（ひでひら） ここにあり

秀衡が逝き 頼朝が攻め
藤原の 三代 ここに散る

柚子

松下 幹生

庭に柚子の木 幼い頃に
父が植えてた 思い出の木
夏には白い 可憐な花を
晩秋に 枝にいっぱい 実をつける
汚れなき人 美人になれと
願いを込めた ゆず風呂に
幸せな日々 過ごし来た

月日が過ぎて あなたと共に
父母の前にて 挨拶をして
娶（めと）る許しの 頭を下げる
父はただ 黙って席を 立ち上がり
庭を眺めて 遂に来たなど
柚子に呟く 独り言
幸せになれ 願う父

初孫を抱き 目尻を下げて
あやす姿を 柚子が見下ろす
春の庭先 至福の時間
代々（橙）に 栄えるように 願い事
庭木に託す 一途な思い
家族の末を 思いやり
幸せ願う 親心

雀奴（じゃんぬ）ダルく

松下 幹生

薄暗い 煙漂う 店内で
明日をも知れぬ 男らが
役満願って 牌握る
来た来た来た 一萬ポン！
出た出た出た セピン ロン！
当たってしまった 満貫に
まだまだやる気 雀士の俺さ

チマチマと 上家の奴は 食い上がり
下家はデカイ 手を狙い
対面さっぱり わからない
カンカンカン 五索カン！
ソレだソレソレ 九萬ロン！
またまた当たった 満貫に
挫けちゃならぬ 雀士の俺さ

しらじらと 夜の帷（とぼり）が 去ってゆく
卓を囲んだ 男たち
目だけギラギラ 光らせて
来い来い来い 六索来い！
リーチだリーチだ 役満だ！
千点キックで 逃げられた
立ち直れない 雀奴ダルくさ

あなたと共に

松下 幹生

この地球（ほし）に住み
あなたと出会い
暗黒の空 暗い思いで 生きてきた
飛び出そう 雲を突き抜け 蒼い空
空よ！雲よ！天に！高く！
そして遥かな 未来へと
あなたと共に

行けども砂漠
荒野の中に 栄華の標（しるべ）
荒涼の夢 知らしめて
地底から マグマのように 沸き上がる
永遠（とわ）の！過去の！夢よ！いでよ！
そして希望の 明日へと
あなたと共に

待ち望む 空が大地が 未知の夢
空よ！夢よ！明日へ！翔んで！
そして遥かな 希望へと
あなたと共に

春雷

松下 幹生

夜中の雷鳴 ふと目を覚ます
隣の君は 怯えた顔で
じっと窓辺を 見つめてた
まだ肌寒い 早春の宵
再びの 稲妻に すがり付く女 (ひと)
あああ
あの日の君は もう帰らない

あの日の僕らは 映画を観てた
エンドロールの ごわめきの中
じっとこちらを 見る視線
君も気がつき 怪訝な顔で
あの人は 誰なのと 僕を見つめる
あああ
あの日に僕は 奈落に落ちた

あの日はどしゃ降り 水無月の夜
いつもの悪い 癖が現れ
じっと出来ずに 声掛ける
優柔不断な 僕の悪癖
雷鳴が 響く中 君は出て行く
あああ
あの日失くした 日常の日々

化石の泪

松下 幹生

泪を 泪を かき集め
遠くへ 遠くへ 棄てに行く
あの日の事を 忘れ去る為
波間を越えて 南の島に
私は一人 たった一人で デッキに佇み
去り行く波を 散り行く波を
風に吹かれて 見つめる私

カモメが カモメが 並び飛ぶ
あいつの 未練は 捨てちまえ
あの日の事を 忘れ去る為
神戸港から 旅立つ事に
一人私は 一人っきりの 見知らぬ島で
去り行く過去を 戻れぬ過去を
見詰め直して 出直す私

岬に 佇み 足元に
泪の 結晶 (かけら) を 深く埋め
ず〜っと永遠 (とわ) に 地中に埋もれ
やがて化石に なることでしょう
そしてきっぱり 過去を投げ捨て しがらみ捨てて
心機一転 明日に向け起 (た) つ
未来に向けて 翔び立つ私

淡路の柴右衛門

松下 幹生

その昔 淡路の国に 居たという
身の丈が 六尺ほどの 大狸
満月に 腹をポンポコ 打ち鳴らし
いたずらモンの 愛嬌者で
その名も 淡路の 柴右衛門
変装上手で 狸のくせに 芝居好き

山道で ある日噂に 聞きつけた
大阪の 面白そうな 芝居小屋
観てみたい 行ってもみたいが 金もない
人の姿に 化けまして
お金は 木の葉の 柴右衛門
舟で渡って 大阪中座 たどり着く

味占めて 毎夜毎夜の 見物に
木戸番が 銭箱の葉を 不思議がり
芝居小屋 はねるのを待ち 犬放つ
何も知らずに 小屋を出た
犬たち 気づいた 柴右衛門
帰らぬ狸 哀れ消えたと 祠（ほこら）建つ

三熊の山の 狸の話

2024・1・11 作成

演歌が沁みる私です

松下 幹生

きっとあなたは 帰ってくると
約束をした 上野駅
最終列車 窓に写った 私の顔が
涙に滲み 歪んで霞む
どこか見たよな 情景に
演歌の歌詞が 頭をよぎる
ああ 演歌が沁みる 私です

待てど暮らせど あなたは来ない
便りもなく 待ちぼうけ
あなたを追って 上野駅から 北国の街
当てなき旅を 列車に揺られ
雪が舞い翔ぶ 窓の外
あなたを想い マフラーを編む
ああ 演歌が沁みる私です

青森駅の 最終便で
函館駅へ 走り出す
あなたは北の 湊で船に 乗っているはず
雪の函館 真夜中の駅
泊まるところさえ わからずに
追って来ました 最北の地へ
ああ 演歌に浸る 私です

2024・1.11作成

銀のライター

松下 幹生

いつもの喫茶 いつもの席へ
いつものあの娘が 寄ってくる
オーダーを取り 離れゆく
ライターの 炎の向こう
あの娘の笑顔 揺れている
あの娘と話 してみたい
あれは昭和も 終わり頃

いつものセブン いつもの一服
いつもの紫煙の 向こう側
可愛い君に 想い寄せ
銀色の ライターそっと
机に置いて 店を出る
あの娘がきっと 忘れ物
気付いてくれる はずだから

いつもの喫茶 いつもの席へ
いつものあの娘が 寄ってきて
忘れ物だと 差し出した
ありがとう 言うのがやっと
会話の接ぎ穂 みつからず
うつむく俺は 意気地なし
あれは昭和の 秋の事

わても浪花のおかんやでえ！

松下 幹生

人情の町 大阪で
あんたと一緒に 生きてきた
そら辛い事も ぎょ～さんあつたで
けどな 世の中捨てた もんやない
着のみ着のままで 出てきたもんに
ほんま親身に 助けてもろて
細々ながら これたのも
近所のおっちゃん おばちゃんが
居ったればこそや
元気してるか？ これ食べゆうて
どんちゃん騒ぎが 大好きで
浪花の下町 人情模様

仕事にあぶれ 辛い時
聞いといたるわと 世話になり
食いつないだ事 何度もあつた
だから 義理人情は 大事やでえ
この街出来たも 太閤はんの
お陰やゆうて お不動さんに
足げく通い 信心し
みんなで支えた この街は
浪花の心
日本一（にっぽんいち）の 人情の街や
下町ごころを 大切に
のちに伝える 思い遣り

ほんまに遠くの 身内より
近所の人に
お世話になって 生きてきた
大阪ええとこ 人情の街

人生峠道

松下 幹生

人は生まれて 育つ時
自分の先に 山を見るのさ
己れが目指す 喜望峰
一步坂道 昇る度
荷物が1つ 増えていく
経験と 知識を拾い
己れの為に 背負うのさ

人に抜かれて 悔やむなよ
人には人の 道があるのさ
自分が決めた 頂(いただき)へ
自分を信じ 突き進む
険しい谷も 丘もある
誘惑も 酒も涙も
己れを磨く 糧(かて)になる

伴侶と共に 頂(いただき)へ
苦勞を分かち 東雲(しののめ)を見る
下りは背負う 荷を配り
自分が得た荷 人に与えて
人生觀を 論(さと)すのさ
共に歩いた 人を讃えて
終(つい)の棲家(すみか)の 花畑

二人の逃避行

松下 幹生

あれは20と5年前
あなたと私 手に手を取って
最終夜汽車で 長崎へ
知り合い頼りの 逃避行
親子の縁を 切ってまで
あなたと添いたい 私です

行った事ない 長崎で
期待と不安 入り交じる中
あなたと始めた 新所帯
1から揃える 生活は
想像以上 厳しくて
それでも二人 幸せで

どこに行くにも 坂の町
海と山とが 綺麗なところで
まわりの人達 温かく
地元に住るよな 心地よさ
二人で来れた 年月を
振り返るたび 思い出す

帰ってみようか ふるさとへ

夢見る私

松下 幹生

ゆめを見ました

山の中 1人でキャンプ していると
タヌキが2匹 寄って来て
食べる物 くれたら化け方 教えると
おにぎり2つ 渡したら
跳べば綺麗に なれるはず
鏡をみたら タヌキ顔

ゆめを見ました

スキー場 やたらと長い ゲレンデで
喜び滑り 下りてくと
突然に ポッカリ穴が 開(あ)いていて
思わず避けた その時に
スッテンコロリン コケまして
前歯が2本 折れました

ゆめを見ました

プールにて 浮き輪でプカリ 浮いてたら
カッパに足を 引っ張られ
ブクブクと 潜った拍子に 目の前に
カッパの顔が 現れて
思わず吹いて 息詰まり
もがいて暴れ 目が覚めた

道成寺縁起

松下幹生

和歌山の 御坊の駅に 降り立つ私
そして来ました 道成寺
堂珍清姫 伝説の寺
仏様から 導き上げて もらえるような
立派な石段 登り詰め
歌舞伎の舞台 見る為に

山門を くぐれば右に 三重の塔
有名な鐘 今はなく
見事な桜の 大木があり
国宝秘仏 千手観音 参道見詰め
伝説絵巻 物語り
語り部聞きに 縁起堂

清姫の 女心に 興味を持って
独りよがりの 片思い
執拗なまでの 追跡場面
安珍逃げる 清姫が追う 寺に逃げ込み
鐘に隠れて 蛇が巻く
炎に焼かれ 終演へ

芭蕉のほそ路

松下幹生

旅する心 感じる為に
奥の細道 車で回る
あなたにねだる 旅紀行
定年旅行 ゆっくり巡る
まずは江戸から 日光向けて
訪ねてみよう 東北の地を

不易(ふえき)流行 感じるために
曾良曾良(そらそら)行くぞ 同伴旅で
あなたと二人 旅日記
実は歩けば 600里あまり
仙台通り 松島をみて
明日は鳴子の コケシを鳴らす

俳句の旅も 出羽三山を
遠くに眺め 弥彦神社を
あなたと二人 参拝し
金沢に寄り 手まり寿司食べ
雪を耐え抜く 永平寺の僧
旅の終わりは 大垣の曾良(そら)

光の中で・・・

松下幹生

春の午後 木陰のベンチ 寝転んで
ぼんやり空を 眺めてた
突然顔が 降ってきて
俺の名を呼ぶ あの娘の顔が 目の前に
仕事中でしょ サボっちゃダメ！と
優しく叱り 走って逃げる
眩しく光る 君が居た

夏の宵 ビアガーデンで 飲んでると
怪しくなった 空模様
突然雨が 降ってきて
僕の上着を 被って逃げる 君と僕
雨オトコだなぁ フラれっぱなし！
濡れた前髪 妙に色めき
妖しく光る その瞳

秋冬と 時間は過ぎて また春に
白いベールの 君と立つ
突然拍手が 包み込む
ライスシャワーの 洗礼受ける 晴れやかさ
今日のあなたは とっても素敵！
君の方こそ オーラに満ちて
しあわせ光る 今、二人

明日の君に！

松下幹生

野辺に一本 タンポポの花
私の家が あった場所
冬を越え 希望の春へ
愛と希望を 抱き留めて
タンポポ綿毛で 舞い上がり
風に乗り 人々の 様子を眺め
高く！そして遠く！
また 花を咲かせて 目を和ませる

あなたの心 私の中で
ゆっくりのんびり 暮らしてる
良かったね！ 温かいでしょ？
私の目から 見ててよね
勇気をしぼって 立ち上がる
明日から 私達 あしたの能登を
育て！そして未来！
また みんなの力 いま取り戻す

心の中に そよ風が吹き
未来に運ぶ 汽車が出る
海青く 穏やかな波
夕陽は朱く 美しい
傷つき萎れた 草花も
いつの日か 必ずや 咲き誇る時
きっと！やって来るはず！
また あの日の笑顔 いま取り戻す

花は優しく・・・

松下幹生

2人並んで 指差す彼方
愛と希望が 待っている
星が 花が 風が きっとあなたに
微笑みかけて 汗と涙を 拭ってくれる

天女が降りて
私を包んで 空に誘(いざな)え
温かな 私を抱いた 手のぬくみ
私が愛した 人達を
祈りが救って くれるはず

乾いた土に 水を与えて
明日を目指して 立ち上がる
星が 花が 風が 私を支え
花は優しく 風も優しく 私を包む

天女が降りて
私を包んで 空に誘(いざな)え
温かな 私を抱いた 手のぬくみ
私が愛した 人達を
祈りが救って くれるはず

星が 花が 風が 私を支え
花は優しく 風も優しく 私を包む

鎌倉娘 松下幹生

あの娘を生んだ 鎌倉の地は
華々しくて 淑(しと)やかな街
君と歩いた 段葛(だんかずら)
食べ歩きした 小町通り
君の姿が 街並みに溶け
見事にはまり 調和する街

着物姿で お寺を巡る
悟りの窓の 明月院や
庭が見事な 報国寺
葛原岡(くずはらおか)の 社では
赤い糸付く 五円を結び
鎌倉彫りの 下駄の音可愛い

衣張山(きぬばりやま)で 夕陽を望み
君は饒舌 歴史を語る
鎌倉口の 切通し
文学館の 夜明かり
由比ヶ浜から 攻め入る話
楽しげに言う 鎌倉娘

ああ 君と一緒に 鎌倉巡り

待ちわびて・・・

松下幹生

窓辺に咲いた ヒヤシンス
あなたがくれた プレゼント
何時も綺麗に 花開き
この部屋を 明るい色に 満たす春
だけど だけど なぜ？
あなたは帰らない
帰らぬ日々を 待ちわびて
涙に暮れる 私です

夢に出てくる あの人は
優しい言葉 くれるのに
何も告げずに 行った人
この部屋は 灯(ひ)が消えたよに 寂しくて
ひとり 耐えて 待つ！
あなたの出て行った
ドアをみつめて 涙する
訳が知りたい 私です

この部屋で 暮らしたあの日 懐かしく
時を 戻し 今！
あなたとの暮らしを
取り戻せたら 望みなど
何も要らない 私です

Back To The...

松下幹生

君は悔やんだ 過去をもたぬか？
あの日 あの時 戻れないかと
なぜあの2択 Bと書いたか？
なぜあの時に 告白(こく)らなかった？
今は後悔 ばかりなり
今は戻れぬ 青い時

俺は今でも 悔やみ悩んで
あの日 あの時 戻れないかと
なぜ迷ったか？ ~~X~~な気がした
世間体とか 付き合い思い
今は後悔 ばかりなり
戻りもできぬ 苦い時

そうだ□□博士に頼み
デロリアン 駆って移動(いく)のさ
あの時戻り 絶体~~X~~と 言いきるさ
やった□□これで老後は 安泰だ
と、ならないかなあ

空へ！ … 君に会いに… 松下幹生

背中(せな)に翼が あったなら
大地を蹴って 飛び上がり
あの娘の越後に ひとつ飛び
弥彦山 上を翔び越え
新潟の街 展望台に 降りたって
ジオラマの中 あの娘を探す

背中に翼が あったなら
新潟の空 飛び回り
トンビに訊ねて みたいけど
ワシ知らん そっぽ向かれて
万代橋で そぞろ行く人 眺めゆき
絶望感に 打ちひしがれる

背中に翼が あったなら
背中に翼が あったなら…
新潟までの 空を飛び越え 必ずや
きっとあの娘を 見つけてみせる

岸和田 男の地車祭り 松下幹生

春木の港 盆を過ぎ
祭り囃子が 響きだす
岸和田だんじり 男の祭り
法被姿も 勇ましい
命を掛けた やりまわし
そーりゃ！ そーりゃ！
男度胸の だんじり祭り

男花道 大工方
大屋根の上 舞い躍る
岸和田だんじり 男の祭り
山車をあやつる 前艇子と
引き手の息も ぴったりと
そーりゃ！ そーりゃ！
男度胸の だんじり祭り

夏の岸和田 血がたぎる
血気盛んな 若い衆
岸和田だんじり 男の祭り
憧れの目で 見上げてた
いつか俺らも やってやる
そーりゃ！ そーりゃ！
男度胸の だんじり祭り

母情

松下幹生

山あいの 川沿い集落
一人で暮らす 母が居る
俺も妹(いもと)も なかなか
帰る事さえ ままならず
それでも母は 子供を思い
野菜や米を 送ってくれる
無理はするなよ 母ちゃん
身体劳れ 母ちゃん
遠くから 母を案じる 息子の心

幼き日 道端の柿
ちぎって食べた それを知り
したたか打たれ 世の中の
やって良い事 悪い事
必死になって 教えてくれた
それが今でも 身体にしみて
俺の誇りだ 母ちゃん
いつも元気に 母ちゃん
遠くから 母を案じる 息子の心

今度の正月 必ず帰省(かえ)る
待っていてくれ 風邪などひくな
無理はするなよ 母ちゃん
身体劳れ 母ちゃん
遠くから 母を案じる 息子の心

海峡越えて

松下幹生

裳裾の乱れを 気にもせず
雪降る中を
駅に向かって 駆け出す私
あなた あなたを 追いかけて
雪の函館 北の街
あなたは1人 汽車に乗り
私を置いて 出て行った

立待岬で 名を呼べば
空しく響き
雪がかき消す 海峡しぐれ
あなた あなたを 恋焦がれ
雪の函館 北の駅
あなたを追って 汽車に乗り
津軽海峡 超えてゆく

あなたの面影 追い求め
青森の地で
噂聞きつけ 訪ねてみれば
あなた あなたが 待っていた
二人で暮らす マンションを
あなたは探し 私呼ぶ
手はずだったと 抱きしめる

空鏡

松下幹生

ふるさとを出て はや2年
父ちゃん母ちゃん どうしてる
畑仕事に 汗流し
野良で昼飯 食べてる頃か
空に鏡が あったなら
里の様子が 見れるだろうか？
帰りたいなあ ふるさとに

雲が流れる 空見つめ
愛しいあの娘は どうしてる
想いも告げず 出てきたが
役場の仕事 慣れたらだろうか
空に鏡が あったなら
あの娘の様子 見れたら良いと
思いよ届け ふるさとに

みんなは俺を 覚えているか
空に鏡が あったなら
俺の様子も 伝えれるのに
帰りたいなあ ふるさとに

金木犀

松下幹生

毎朝歩く 散歩道
いつもと違う 漂う香り
ふと見上げれば 金木犀が
可憐な花を 咲かせてた
辺りに笑みを 振り撒くような
ほんのり香る 秋の華

通りゆく人 それぞれに
香りを感じ 見上げる樹(き)には
今年も季節 忘れもせずに
ちりばめられた 金の粒
道行く人に 香りのシャワー
幸せ降らす 秋の華

季節も過ぎて はらはらと
花を散らせて 降り積もる花
道に黄金の ジュウタン広げ
街を黄色に 水玉の
模様を描く 名残りを遺し
静かに消える 秋の華

雑兵(ざっぴょう)の詩(うた) 松下幹生

東雲(しののめ)の 空に上がった
刃(やいば)のような 細い月
辺りの雲は 朱に染まり
戦(いくさ)の予兆 伝えてる
あの方は お館様に 駆り出され
北へ十里の 国境(くにざかい)
手柄など 思いもよらぬ
無事に帰れと 手を合わす

如月(にょげつ)には 帰ってくると
たった一言 言い残し
村の門口 男衆(おとこし)と
共に連れ立ち 出て行った
あの方は お館様に 駆り出され
槍一本の 軽装備
身を守る 具足(ぐそく)も無しに
寒空の下 どうしてる

男衆が お館様の 命により
田植えの前に 帰されて
待ち望む あなたを見つけ
嬉し涙に くずれ落ち

雑兵(ざっぴょう)の詩(うた) 松下幹生

東雲(しののめ)の 空に上がった
刃(やいば)のような 細い月
辺りの雲は 朱に染まり
戦(いくさ)の予兆 伝えてる
あの方は お館様に 駆り出され
北へ十里の 国境(くにざかい)
手柄など 思いもよらぬ
無事に帰れと 手を合わす

如月(にょげつ)には 帰ってくると
たった一言 言い残し
村の門口 男衆(おとこし)と
共に連れ立ち 出て行った
あの方は お館様に 駆り出され
槍一本の 軽装備
身を守る 具足(ぐそく)も無しに
寒空の下 どうしてる

男衆が お館様の 命により
田植えの前に 帰されて
待ち望む あなたを見つけ
嬉し涙に くずれ落ち

標(しるべ) 松下幹生

人生は 標(しるべ)無き道
幼き日 親の導き 示されて
個々それぞれに 我が道を決め
己の道を 突き進む
人の足跡 追いかけては
その人を 追い越す事は かなわない

当然に 山谷があり
海があり 川で行く手が 遮られ
乾いた道も 泥濘(ぬかるみ)もある
己の道を 真っ直ぐに
時には人の 助けを借りて
決めた道 弱音を吐くな 挫けるな

後ろ指 指されぬような
生き方で 高峰(たかみ)じゃなくて
かまわない
一途に極め 突き進むなら
己の道は きっと開ける
微笑む明日を 迎える為に
我が道を 希望を持って 一人行く

志摩の磯笛 松下幹生

真珠のいかだ 浮かぶ海
内海の 風ぎの水面に 舟が行く
磯に育った 母ちゃんが
幼い頃に 教えられ
女の子 これが天職 海女となり
母は 磯笛の
吹き方知らず おばあに習い 一人前に

夕陽傾く 英虞湾の
海女小屋で 女同士の おしゃべりが
何より楽し 盛り上がり
採ったばかりの 海の幸
しゃがれ声 手拍子に乗せ 海女の唄
志摩の 女らは
明日の糧を 気力を上げる 家族の為に

磯笛響く 志摩の海
母ちゃんが 海に潜って 子を育て
ずっと磯場で 暮らし来た
旅行も行かず 街も出ず
潮風に さらされ続け 荒れた肌
いつか いつの日か
僕が働き 口紅1つ 母の日贈る

ミニの唄 松下幹生

コンビニ前の 坂道を
軽やかに来る 赤いミニ
今朝も立ち寄る 俺の店
ミニスカートの 裾ひるがえし
気取って歩く いつもの娘
どこの誰だか 知らないが
とても気になる 女の子

いつも決まって ミニでミニ
スラリと伸びた 脚をして
わき目もふらず コーヒーと
サンドイッチを 買う為に寄る
ツンとすました 横顔で
店内歩く 颯爽(さっそう)と
とても絵になる いつもの娘

いつもの時間 坂道を
ミニが登って 来ないのが
とても気になる 今朝の俺
どうかしたのか? 風邪でもひいた?
考えてたら 坂道に
ミニが現れ 男連れ
イチャつく2人 凹む俺

小樽の夜 松下幹生

小樽を訪ね 出会った二人
何もない 何も知らない
白紙のまま 連れ添う2人
夜の香りに 包まれて
そぞろ歩きの 運河沿い
潤む橋の灯 眺め行き
2人の足音 遠ざかる

酒場の重い 扉を肩で
押し開く コートの男
女の連れは 不安げな目で
煙りに霞む 店内を
戸惑いながら 見詰めてる
席に導く 男の手
促されるまま カウンター

小樽の夜を 楽しむ為の
今夜だけ 話相手を
みつける為に 運河の端で
寂しげな娘を 探してた
うつむき歩く ブーツの娘
声を掛けると 見上げた目
憂いが漂う 小町顔

モネの池

松下幹生

美濃板取の モネの池
わき水集め 透き通る水
名もない池が 名所となって
モネの絵のよに 泳ぐ鯉
水草くぐり 優雅に遊ぶ
行ってみたいと あなたは言って
山の中まで ドライブを

風光明媚な 山と川
身に覚えない 心の故郷
何故か懐かし 山あいの風
田の脇道を 登り行き
急に現る モネの絵の池
その素晴らしさ 心洗われ
思わず見入る 池の淵

時間を忘れ 引き込まれ
あなたに呼ばれ 現(うつつ)に戻り
あなたと共に 水辺を巡る
絵画の世界 堪能し
心にたっぷり 景色を詰めて
立ち去りがたい 気持ちを抑え
夕暮れの中 背をむける

恋の狩人 松下幹生

スクランブルの 交差点
信号変わり 歩き出す
一人笑顔で 近づく男
知り合いかしら？ 覚えがない
さっちゃんだよね□□いいえ違うワ
見え見えの きっかけ作りの お声掛け
お粗末手口 恋の狩人
今日も現わる

チャライ姿の ダサ男
ガードレールに 腰掛けて
ずらした眼鏡 上目で見てる
いけてるつもり？お呼びじゃないワ
ヨレヨレの ビンテージ物 似合わない
時代遅れの 街の狩人
おとといおいで！

見てしまったの あの男
女子高生に 声掛けて
いきなりダッシュ！ 逃げられていた
何なのアイツ！ バッカじゃないの？
でもあいつ 街の噂を 聞いたならば
青少年課の おまわりさんで
仕事なんだ…と、

歌(SONG) 松下幹生

歌は 心励まし
歌は 人生語り
歌は 思いを届け
歌は 明日(あした)の希望
人生の 悲しい時や 辛い時
思わず知らず 口をつく
思い出の歌 好きな歌
明日を支え 未来を笑顔に
歌は心の 拠り所
希望に生きる 我が人生

歌に 感動憶(おぼ)え
歌に 寄り添いながら
歌に 魅力を感じ
歌に 胸踊らせて
音楽に 行く道を悟(し)り 歩き出す
幼い頃に 母の胸
おぼろに聞いた 子守唄
甦(よみがえ)る歌 口ずさむよに
歌の世界は 永遠の
1人で出来る コンサート

聴きながら 眠りについた 癒し歌
夢のゆりかご 気持ち良く
音を楽しむ この世界
歌の魅力は みんなと共に
心踊らす 恋模様
気持ちをつなぐ 虹の橋

倉敷旅情 松下幹生

柳並木の うるむ灯が
掘り割りの 水面に映えて
美しい街 倉敷の
宵の街並み 二人で歩く
ほら見てあそこ！
はしゃいで駆ける お前の姿
幸せ薰る 二人連れ

昔の風情 忍びつつ
立ち並ぶ 蔵や洋館
赴(おもむ)き醸(かも)す 美観地区
そぞろ歩きの 昼下がり時
ほら見てあそこ！
おしゃれなカフェで 一休みする
のんびり旅の 二人連れ

日本最古の 美術館
川舟で ゆったり眺め
紡績跡の 蔦の這う
アイビースクエア 今夜の宿で
ほら見てあそこ！
ライトアップの 古い街並み
肩を寄せ合う 二人連れ

月ヶ瀬梅溪 松下幹生

ほのかに薫る 梅の花
月ヶ瀬の地に 春が来る
山の斜面を ピンクに染めて
今年も忘れず 春が来た
年に一度の 華やかさ
人で賑わう 梅まつり
あの人今年は 来てくれるかな？

奈良の梅溪 名勝地
写真家たちが 撮りに来る
雲海越しの 一目八景
今年は忘れず 彼も来た
撮影あとの 腹ごなし
ここの名物 梅うどん
あの人私を 覚えてるかな？

覚えてるとも モチロンさ
月ヶ瀬美人 忘れない
去年は来れず 悔しい思い
今年は必ず 撮りに行く！
心に決めて 飛んできた
君の写真が 撮りたいと…
あの人私の 心を取った

時間は守れ！ 松下幹生

あなたがくれた 腕時計
時間にルーズな 私の為に
あなたとペアの おしゃれな時計
デートの日には 必ずはめて
そうじゃない日も 肌身離さず
大事な大事な 宝物

いつかあなたが 言っていた
時間にルーズな 人間は
人に信用 してもらえない
君は決して そうじゃないから
時間通りに 動いて欲しい
彼からの言葉 噛みしめて

いつもキチンと 来る彼が
時間にルーズじゃ ない彼が
今日は姿を 現さなくて
電話も出ない どうしたのかな？
心配になり 焦っていると
彼からの電話 寝坊した！

心配したのよ ばっかっ！

雨の中に・・・

松下幹生

雨降る坂を 去り行く背中
コートの際を 立てながら
振り向きもせず 去り行くあなた
灯りが照らす 後ろ影
きっと きっと きっとあなたは
心の中で 悔やんでるはず
私の側に 居られぬ事を

三年前も 篠つく雨に
傘も持たずに 雨宿り
あなたの姿 見かねた私
送りましたか 声掛けた
きっと きっと きっとあなたは
心の中で 戸惑いながら
私の好意 喜んだはず

月日は流れ 共に暮らして
幸せな日々 続いたが
あなたの胸に 女の影が
時々よぎる 移り香に
きっと きっと きっとあなたは
心離れて 行こうとしてる
私が邪魔に なったのかしら

片方だけのイヤリング

松下幹生

カフェの椅子 1つ転がる イヤリング
先ほど急ぎ 出て行った
若い女が 落とした物か
待ち人が来て 慌てたか
知り合い見つけ 隠れたか
どちらにしても
気がついたなら 慌てるだろな

バスの床 1つ転がる イヤリング
混みあう車内 揺れた時
あのご婦人が 落とした物か
隣の人の 肩に触れ？
つり革掴む 瞬間に？
どちらにしても
気がついたなら 慌てるだろな

階段に 1つ転がる イヤリング
仕事で慌て 駆け上がる
人にぶつかり 落とした物か
うっかり者の 女子社員
謝りながら 急ぎ行く
どちらにしても
気がついたなら 慌てるだろな

佐渡まで掛かれ虹の橋

松下幹生

越後の海の その彼方
うっすら見える 佐渡の島影
お役人から 声掛かり
佐渡の金山 掘るために
稼いでくると 勇んで行った
あの人どうして いるかしら
身体を壊しちゃ 元も子もなし

佐渡によことう 天の川
七夕星の あなたと私
飛んでは行けぬ 四十九里
たらい舟では 行けやせぬ
怒濤渦巻き 吹き付ける雪
あの人どうして いるのやら
涙を集めて 便りに託す

あなたを思い 海を見る
山を二つに 割るほど辛い
危険な務め やり遂げて
帰るその日を 待ちわびる
柏崎から あの人思う
あの人どうして いるかしら
島まで届けよ 虹の掛け橋